全国の園長先生に
無料でお届けしています

子どものよりよい育ちをともに考える

これからの幼児教育

2020 Autumn

秋

特集

変わる保育・変わらない保育

――想定外の事態の中で考える「これから」の幼児教育――

新型コロナウイルス感染症に関する調査・解説

❶保育・幼児教育施設に向けた調査

東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター

❷保護者に向けた調査

ベネッセ教育総合研究所

インタビュー

コロナ時代の園づくりと安全管理

ジャーナリスト、名寄市立大学特命教授
猪熊弘子

園の取り組み事例

鳴門教育大学附属幼稚園（徳島県・国営）
まちのこども園 代々木公園（東京都・私営）

PDF版では表紙写真を
公開しておりません。
ご了承ください。

ベネッセ教育総合研究所

今号の写真［表紙 / 裏表紙 / 上］
◎太陽の子保育園（東京都・私営）

本誌をお手にとっていただき、ありがとうございます。
今号は、新型コロナウイルス感染症についての２つの調査の分析･解説とともに、保育･幼児教育への影響や課題、具体的な取り組みをご紹介しています。感染拡大防止の観点から、園を含むすべての取材は、ウェブ会議システムで行いました。
今回の取材を通じ、先の見えないコロナ禍でも真摯に子どもと向き合う園の先生方の姿に、改めて感銘を受けました。同時に、感染対策等で先生方の業務量が増え、大きな負担がかかっている状況にも心が痛みました。業務負荷軽減のためにICTツールを活用するなど、先生方のお仕事環境が、今回のコロナ禍による環境変化をチャンスとして、よりよい方向に向かうことを願っています。
最後に、コロナ禍の１日も早い収束を願うとともに、誌面でご紹介した調査にご協力いただいた皆様と、取材にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

「これからの幼児教育」編集部

STAFF

編集発行人／岡田晴奈　発行所／（株）ベネッセコーポレーション
印刷製本／凸版印刷（株）　監修／北野幸子（神戸大学大学院准教授）
企画・制作／ 仙田由紀子（ベネッセ教育総合研究所）
編集協力／（有）ペンダコ、丹羽三千代、菊池健（mananico）
執筆協力／二宮良太
撮影協力／菊池健（mananico）　誌面デザイン・イラスト／へんな優

CONTENTS

1 特集
変わる保育・変わらない保育
――想定外の事態の中で考える「これから」の幼児教育――

2 「〈園対象〉保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査」より
東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター
野澤祥子／淀川裕美／高橋翠

8 「幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査」より
ベネッセ教育総合研究所

10 インタビュー
After/With コロナの時代の園づくりと安全管理
ジャーナリスト、名寄市立大学特命教授、城西国際大学特命連携教授
猪熊弘子

園の取り組み事例
14 鳴門教育大学附属幼稚園（徳島県・国営）
18 まちのこども園 代々木公園（東京都・私営）

※今号の表紙・裏表紙・本ページの写真は、新型コロナウイルス感染症の発生状況に鑑み、前号製作の際に撮影した写真を使用しています（2019年撮影）。
※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。

※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2020

変わる保育・変わらない保育

――想定外の事態の中で考える「これから」の幼児教育――

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）の感染拡大により緊急事態宣言が発令された中、働く人々を支えるという社会的役割により、開園を続けた園がありました。一方で、葛藤を抱えながら休園した園もありました。そうした今までにない状況下で、保育には密なかかわりが不可避であることに、改めて気づいた保育者は多かったのではないでしょうか。
不透明な社会の中で、私たちはいま一度、「これから」の保育を考える必要に迫られています。今号では、複数の調査結果や、専門家の提言、園の実践をご紹介する中で、「これから」の保育のヒントを、ともに考えていきます。

「〈園対象〉保育・幼児教育施設における
新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査」より

保育の質向上と感染対策 2つの軸で園のあり方を探る

コロナの感染が拡大する中、各地域や各園で手探りの対策が進められてきました。全国各地の保育現場での課題意識や具体的な対応を共有することで、有効な方向性を見いだすことを目的として、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（以下、Cedep）では、園長・施設長などを対象とした調査を実施しました。同調査にかかわった３人の先生方に、データから見えた現状や課題、今後の取り組みのヒントをうかがいました。

東京大学大学院教育学研究科附属 発達保育実践政策学センター（Cedep）

准教授
野澤祥子先生
（のざわ・さちこ）
博士（教育学、東京大学）。専攻は発達心理学・保育学。内閣府「子ども・子育て会議」委員。厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」委員。

PDF版では写真を掲載しておりません。ご了承ください。

特任准教授
淀川裕美先生
（よどがわ・ゆみ）
博士（教育学、東京大学）。専門は保育学。２歳児同士の対話、食事場面での保育者と子どもの対話、園内研修での対話や学びについて、主に研究している。

特任助教
高橋翠先生
（たかはし・みどり）
専門は認知心理学、発達心理学。Cedepでは主に未来社会Society5.0における保育のあり方を探るべく、ICTやAIを活用した実証研究に取り組んでいる。

1 調査のねらい

今回の調査は、現場の管理職や保育者にどう活用してほしいと考えて実施されたのでしょうか。

実態を捉えたデータをもとに今後の保育の議論を深めたい

野澤先生　Cedepでは、日常的に園の現場を訪問して、乳幼児期の発達と保育の実践・政策を研究しています。ところが、コロナの感染拡大を受け、2020年２月後半から園訪問が困難になりました。この非常事態に私たちに何ができるかを考え、まずは今の特殊な状況を正確に捉えた上で現場に寄り添い、今後の保育を考えることが重要と判断して、全国に向けた調査を企画しました。

現在の状況はだれにとっても初めての経験であり、さまざまな分野の専門家が手探りの対策を試行しています。この調査も１つの答えを導き出すのではなく、あくまでもデータから見えることを議論の俎上（そじょう）に載せて、今後の保育の方向性を見いだしていく一助となることをめざしました。

調査全体を通して、地域、園、そして、個人により、状況は大きく異なることが改めてわかりました。今後の対策を検討する上では、大前提として、その多様性を尊重しながら問題を１つに集約しないことを大切にしていきたいと思います。

2 《保育や行事のあり方》

感染対策という制限のある状況の中で、
日々の保育や園行事はどのように捉えるべきとお考えでしょうか。

感染対策に偏りすぎず園の理念とのバランスを考慮する

野澤先生　現在の状況では感染対策を欠かすことはできず、いわゆる「３密」の回避が求められます。感染対策は、園運営の１つの「軸」になっていると思います。その背景には、子どもや保護者、保育者を感染から守りたいという思いに加え、感染者に対して厳しい目が向けられやすいという社会の状況も関係しているのでしょう。

しかし、園には安全管理だけではなく、保育を通して子どもの育ちを支えるという重要な役割があります。いま一度、もう１つの軸として、園ではどのような子どもを育てたいかという理念や方針を見つめ直す必要があります。そして、園の理念と感染対策という、２つの軸をしっかりともち、そのバランスをとりながら日々の保育や行事のあり方を検討することが大切だと思います。

２つの軸をもつと、「子どもの育ちのためにすべきこと」と「感染対策のためにすべきこと」が見えやすくなります。例えば、「情緒の安定のために必要な抱っこは、子どもの育ちを支える上で欠かせないため、しっかりと行う」「消毒や換気は丁寧に行う」など、バランスを考慮した保育のあり方が見えてきます。運動会などのさまざまな行事も、一律に中止するのではなく、子どものためにできることが見えやすくなると思います。

この２つの軸のバランスは、園によって、また、そのときの状況によっても異なります。地域の感染状況は刻々と変化しますし、立地や施設の構造設備などの園固有の事情のほか、保育者や保護者の考え方などさまざまな要素を踏まえて、判断を行う必要があります。

その際に大切なのは、いつでも子どもを真ん中に置いて考えることです。園はあくまでも子どもの遊びや学び、育ちを保障する場であることを保護者と共有し、保護者からの声を聴きながらも、「子どもにとってどうか」という視点から一緒に考えることができるとよいと思います。

園行事や日々の保育の意義を問い直して改善する好機でもある

淀川先生　コロナ禍にある今の状況のように、私たちは今後、先行き不透明で答えのない問題にますます出合うでしょう。そうした答えのない問題に対して、他者との対話の中で知恵を寄せ合い、判断し、新たな知を生み出していくことが求められています。子どもの育ちとしても大切ですが、私たち大人も今まさに、それが問われています。大変な状況ですが、私たちが多様な価値観をもちながら、よい意味で変化するきっかけとしてこの状況を捉え、議論できたらと思います。

実際、感染対策の取り組みとして多く挙げられたのは、園行事の中止・縮小でした（P.4 図1）。当初の目的は感染対策でしたが、「これまで通りのやり方でよいのだろうか」「本当に子どもや保護者のためになっていたのか」などと問い直すことにより、結果的に行事の改善につながったといった声も多く聞かれました。また、感染対策の一環として、一斉の活動を個別にしてみたら、子どもの姿が前よりも見えるようになったという保育者

■〈園対象〉保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響に関する調査

調査の実施者：東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）
調査の目的：新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、安全・安心を確保しつつ、子どもたちの遊びや学び、育つ権利を保障することが難しい状況に直面する中で、保育・幼児教育の現場での対応と家庭の実態について現場の声から把握し、共有・発信する。
調査内容：園の基礎情報、コロナにかかわる園の状況、コロナ予防対策、職員のストレス状況、家庭への対応、自治体・国の対応
調査対象者：保育・幼児教育施設の園長・施設長及び職員（すべての役職の方々）
実施期間：2020 年 4 月 30 日～ 5 月 12 日
調査方法：ウェブ調査（Cedep ウェブサイト上での協力依頼、保育・幼児教育関連団体への周知依頼、その他 SNS などによる周知を行った）
有効回答者数：954 人（幼稚園 27 人、認可保育所 317 人、認定こども園 544 人、その他 66 人。私立園の関係者が 9 割前後を占める）
◎報告書 PDF は、以下のリンク先よりダウンロード可能です。
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/projects_ongoing/covid-19study/

の声も聞かれました。

一方で、懸念点の１つが、現在の状況が長引くことによる子どもへの影響です。４、５歳児であれば感染対策やソーシャルディスタンスについて丁寧に説明をすれば、自分たちなりに考えて行動ができます。しかし、より年少の子どもは「頻繁に手洗いや消毒をする」「人となるべく離れる」「食事中に話さない」などといったことを、常識と受け止めてしまう恐れがあります。

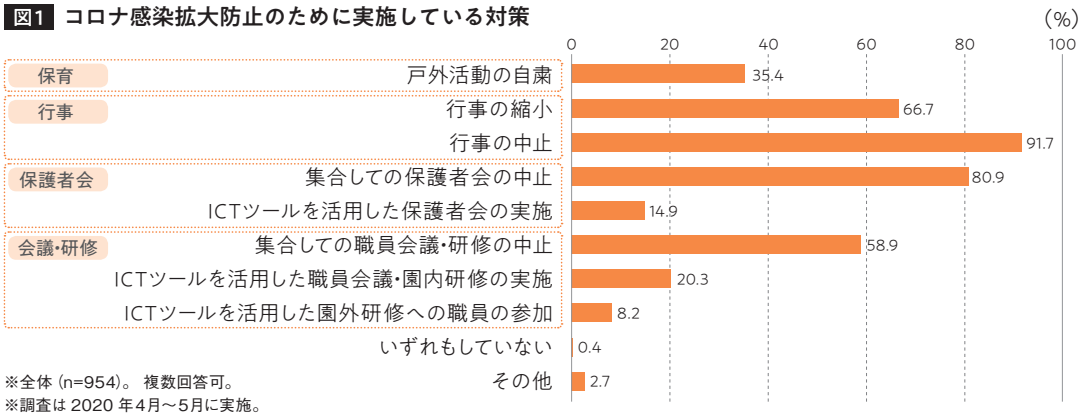
今後もしばらく感染のリスクがある中で、この時期だからこそ必要な、他者との親密な関係の中での子どもの育ちや大切な経験をどう守れるかが、重要なテーマとなっていると思います。

するべきこと、できることを地に足をつけて考えたい

高橋先生　コロナの感染拡大に伴い、新たな保育に移行しなければとプレッシャーを感じる園が多いかもしれません。しかし、必要な感染対策を施した上で、自園の理念に沿った保育を行い、その方針を保護者に発信するという枠組みの中で具体的に考えていくと、案外、「特別に新しいことをする必要はない」という結論に至る可能性も高いのではないでしょうか。まずは地に足をつけて、するべきことやできることを１つずつ考えていきましょう。その際には、感染の予防対策だけでなく、感染したときにどう把握・処置するかといった対策も、自治体と連携しながら構築していってほしいと思います。

コロナ禍をきっかけとして、ICT ツールの導入もこれまで以上に検討されています。従来は事務作業の省力化の一環として活用されるケースが多かったのですが、幼児教育や子育て支援の可能性を広げるツールとしても注目されるようになりました。これまでの幼児教育の歴史や財産からよい部分を引き継ぎつつ、テクノロジーを効果的に導入して、新たな幼児教育を探究していくタイミングにもなっていると感じています。

図1　コロナ感染拡大防止のために実施している対策



※全体（n=954）。複数回答可。
※調査は 2020 年4月～5月に実施。

3 保護者対応

現在の状況を乗り越えるためには保護者との協力が欠かせません。保護者と良好な関係を築く上では、どのような点が重要とお考えでしょうか。

保護者も当事者としてともに向き合う関係を築く

高橋先生　コロナ禍は、子どもと保護者にとって、園が重要な社会インフラであること、そして、現状では保育や幼児教育を担う主体が家庭か園の２択になっていることを、改めて浮かび上がらせました。保護者は園に子どもを預けることで仕事や家事などができますし、子どもは園生活を通してほかの子どもとつながり、社会に参加する場をもつことができます。その機能が一時的に断たれて、園の重要性に改めて気づいた保護者が多かったようです。

コロナに対する保護者の考え方は個人差が

非常に大きいことが調査でも明らかになりましたが、一部には園に対して「ゼロリスク」を求める様子も見られます。保護者が園に完璧な対応を求めて何かあるたびにクレームを入れる状況では、保護者と保育者の双方がストレスを感じやすいですし、園が感染対策に過度に偏ることにもなるでしょう。実際に、保育者の悩みは、「保護者対応」が最も高い割合を占めています（図2）。

保護者自身にも園運営の当事者という意識をもってもらい、一緒に話し合いながらコロナに向き合っていく関係が理想です。そのためには、園が保育を通して実現したい理念を明確にして、コロナの感染対策と並行してどのような育ちを支えたいかをわかりやすく伝えることが求められるでしょう。

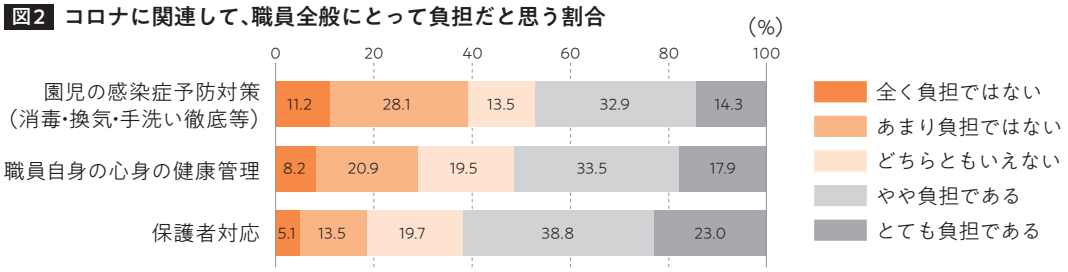
自園の考え方を誠実に、的確に、自分たちの言葉で伝える

淀川先生　コロナ禍の状況で体験したこととして、情報の不足や不確かさ、情報伝達の遅れが、不安や不信感、ストレスを生むということがありました。

登園自粛などの自治体の方針を保護者に伝える機会は多いと思います。事務的に通知した園もあれば、自園の考えを交えて自分たちの言葉で説明した園もあったようです。後者の方法をとったある園では、その後の保護者との関係も良好だったとうかがいました。園の当事者としての考えが具体的に伝わると、保護者もまた、自分たちの意見を述べて一緒によりよい保育を考えていこうという思いがもてるのだと思います。

また、先日、園児に感染者が出た園の園長先生にお話を聞く機会がありましたが、できる限り先手の情報発信を心がけたことで、大きな混乱は生じなかったそうです。情報発信が遅れると、うわさが独り歩きしたり、臆測を呼んだりして、不信感につながりかねません。園が当事者として、自園の考え方を誠実に、的確に伝えることが、保護者と対話のできる関係性をつくる鍵になると考えます。

図2　コロナに関連して、職員全般にとって負担だと思う割合



※全体（n=910）。　※調査は 2020 年4月～5月に実施。

4 子どもや職員のメンタルヘルス

子どもや保育者の不安やストレスを軽減するために、園ではどのような取り組みができるのでしょうか。

現実問題の解決と心のケアの両面から保育者のサポートを

淀川先生　コロナ禍という不安な状況の中、だれもが多かれ少なかれストレスを抱えています。園では、保育者が子どもに説明したり一緒に話したりすることもありますが、子どものほうから遊びの中で「ソーシャルディスタンスなんだよ」と言って、経験を再現したりします。ゆったりとした雰囲気の中で、子どもが安心して思いを出すことができ、保育者も子どもの表現を受け止めたり、共感したりすることが大切だと思います。各家庭の感染への心配のしかたもさまざまで、なかには極度に心配している家庭もあるでしょう。子どもにとって園という場で自分の不安やよくわからない気持ちを出せるということが、とても大事だと考えています。

また、園運営においても、保育者の抱える

不安やストレスへの対処が大きな課題です。調査では、職員（同僚）や回答者自身がどのようにストレスを緩和しているかを聞き、５つの観点で整理しました（図3・図4・図5）。

回答者自身でもっとも多かったのは、運動や趣味などで気分転換やストレス解消を図る「気晴らし型コーピング」でした。

職員（同僚）で一番多かったのは「問題焦点型コーピング」でした。これは感染対策や勤務形態について話し合うなど、直面する問題そのものを解決しようとする行動です。次に多かったのは、ストレスや不安などの感情をだれかに話して発散する「情動焦点型コーピング」でした。このように現実問題の解決と情動面のケアの両方を行うことは、保育者のストレス緩和に有効と考えられます。

調査時から数か月が経ち、自治体などによる取り組みも進んでいるとは思いますが、職員同士のケアだけでなく、外部とつながり、保育者の心のケアができるネットワークの充実が望まれます。

ネガティブ感情とのつき合い方を研修などで共有したい

高橋先生　もやもやとした気持ちを抱えたままでは不安は解消されません。できるだけ自分の感情を言語化して意識化すると、対処法が見えてくるということもあります。そうしたネガティブな感情とのつき合い方について、園内研修などで共有するのもよい方法です。その際、不安やストレスは一人ひとり固有のストーリーがありますから、１つに集約することなく、ファシリテーター役の人がそれぞれを引き出して、対話をしていくことが大切になります。

人間のストレスモデルでは、直近の問題に対処するために強いストレス反応が表れた後、問題が長引くと、緊張感が保てずに気分が落ち込むなどのうつ状態に陥りやすくなります。そうした兆候を見逃さないために、保育者が相互にメンタルヘルスをチェックする体制を整えることも大事でしょう。

対話により意見を共有して園内に安心できる風土を

野澤先生　コロナに対する考え方は、園内でも大きな個人差が表れます。例えば、園長、保育者、看護師で感染対策をどこまですればよいかの考え方が異なることがあります。そのままの状態にしてしまうと園内に相互不信

図3　ストレスコーピングの定義

問題焦点型コーピング
直面している問題そのものを解決しようとする行動。自分の力ではどうにもならない場合は、担当を代わってもらうなどの回避行動も含まれる。

認知的再評価型コーピング
直面している問題に対して、見方や発想を変えて前向きに考える、あるいは距離を置くなど、認知を再評価し、適応するための対処行動を指す。ポジティブシンキングとも呼ばれている。

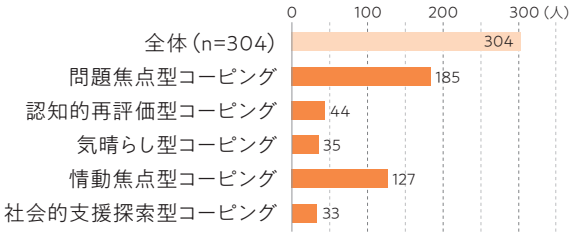
気晴らし型コーピング
運動、趣味、レジャー、カラオケなどのいわゆるストレス解消法で、気分転換、リフレッシュ、ヨガなども該当する。

情動焦点型コーピング
ストレスや不満や不安、悲しみなどの感情をだれかに話すことで、発散する方法。

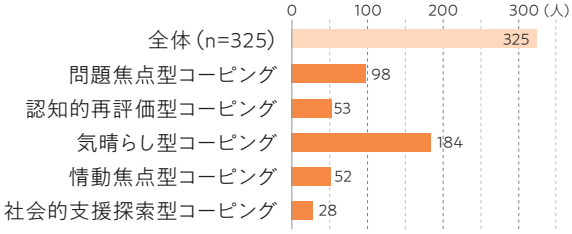
社会的支援探索型コーピング
問題に直面したとき、上司や同僚、家族、友人などに相談し、アドバイスやサポートを求める対処行動。

図4　職員（同僚）および回答者自身のストレスを緩和するために行っていること・心がけていること

①職員（同僚）のストレス緩和のため



②回答者自身のストレス緩和のため



※複数回答可。　※調査は 2020 年4月～5月に実施。

が生じて、それが子どもの育ちにマイナスの影響を及ぼす恐れもあります。

園の理念と感染対策という２つの軸のバランスをどこに置くか、園内でしっかりと対話をして考えを共有し、園内に温かな安心の風土をつくっていくことが、すべての基本になると考えています。

図5 「職員（同僚）のストレスを緩和するために行っていること」の具体的な記述（抜粋）

問題焦点型コーピング

- 園内の衛生管理を徹底し、コロナ感染対策をする。
- 情報を共有する（決定事項は速やかに全職員へ知らせる等）。
- 職員に衛生物品やマスクなどを支給する。

認知的再評価型コーピング

- いつもと変わらない保育でよいことを伝え、心に余裕をもった勤務を促している。
- 預からなければいけない子どもを預かっているのではなく、私たちが子どもたちを預かっているから社会が回っているというプライドをもてるように伝えている。医療従事者等を支えていることを誇りに思う。
- できることをして感染したらしかたがないという気持ちで仕事をしている。

※調査は 2020 年４月～５月に実施。

気晴らし型コーピング

- 休憩をしっかりとる。
- ノンコンタクトタイムをとる。
- 戸外や換気のよい場所で距離を保って軽い運動やリズム体操、ヨガなどを預かりの子どもたちとともに行う。

情動焦点型コーピング

- 積極的に声かけをする、職員同士がおしゃべりしやすい環境をつくる。
- ICT ツールを活用し、まめにコミュニケーションをとる。
- 情報交換というおしゃべりの場で、話を聴く。愚痴も可とする。

社会的支援探索型コーピング

- 話し合いを行い、職員の不安の軽減に努めている。
- 不安はその都度解決できるように、何かあればいつでも話を聴き、相談に乗ることを心がけている。
- 職員同士でやり方や不安な点などを話し合う機会を設ける。

5 現場のみなさんへのメッセージ

最後に保育の現場で奮闘する保育者のみなさんにメッセージをお願いします。

高橋先生　保護者調査*では、園に対する感謝の言葉が何度となく聞かれました。保護者対応に難しさを感じる場面も多いかもしれませんが、多くの保護者は園や保育者に深い感謝の念を抱いていることをお忘れにならないでください。そして、地域の子どもの育ちを支える重要な存在であるという意義と価値を、何よりも保育者のみなさんご自身に十分に認識していただきたいと思います。

淀川先生　さまざまな考え方や価値観が行き交う中、感染対策とこの時期の子どもたちにとっての大切な経験とのせめぎ合いの最中で、日々の保育をされていることと思います。感染予防を考えた環境構成、人の配置、送迎方法など、方法論の検討が進む一方で、子どもや保育について大切にしてきた価値や、描いていた未来はどのようなものだったかを、改めて問う時期に来ていると思います。いろいろな対話を通して、一緒に考えていきたいです。

野澤先生　園や保育者に対してさまざまな要求が寄せられる中で、精いっぱい子どもたちを守ろうとする姿には感謝と尊敬の念を覚えています。子どもの育ちこそみなさんの喜びであり、やりがいでもあるのでしょう。感染対策を施しながら、子どもの育ちを大切にする保育は容易ではないと思いますが、本調査が今後の実践の参考になることを願っています。調査では、みなさんのご協力により現場の貴重な声が集まりました。そのデータをもとに社会に情報を発信し、みなさんと一緒に考えていくという循環をつくり出し、微力ながら、今後の保育・幼児教育に貢献していきたいと思います。

＊ Cedep では、本調査と同時期に、保護者を対象とした「新型コロナウイルス感染症流行に伴う乳幼児の成育環境の変化に関する緊急調査」を実施しています。

「幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査」より

コロナ禍を受けて「つながり」を求める保護者の姿が明らかに

ベネッセ教育総合研究所では、コロナによる感染症の流行とそれに伴う生活環境の変化が、幼児と保護者に与えた影響を明らかにすることを目的に、調査を実施しました。その結果から見えてきたのは、子育てを通した「人とのつながり」を強く求める保護者の思いでした。

８割以上の保護者が以前より「つながり」を重視

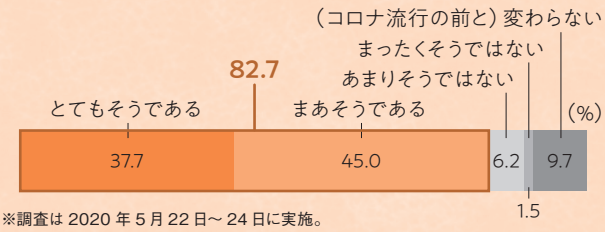
コロナ流行による保護者の気持ちの変化を象徴的に表しているといえそうなのが、（図1）です。流行前と比べて、「人とのつながりを大切にしたいと思うようになった」と答えた保護者は、実に８割にも上りました。その背景には、コロナ禍により一時的に人とのつながりが断たれて、物理的、精神的にさまざまな不安や苦労が生じやすい状況があったことが考えられます。

「コロナ流行に伴う悩みや気がかり」を聞いた設問でも、子ども同士のつながりがもてないだけでなく、保護者自身が園や地域とのつながりを失ったことに悩む声が少なくありませんでした（図2）。自由記述回答にも、「子育て支援センターなどで、ほかのお母さんや子どもたちと交流できることがどれほど貴重な時間だったかと改めて感じた」「園は、ただ預かってもらう場所ではなく、子どもも親も第三者とかかわって育つ場所だと感じた」といった声が寄せられました。

人とのつながりの有無は子育てに対する気持ちに関連

「人とのつながり」は、子育てに向き合う気持ちにも関連するようです。子育てを通した人とのつながりがあると答えた保護者のほうが、子育てに楽しさを感じやすく、不安や悩みを抱え込みにくいという結果が出ています（図3）。子育てに悩みはつきものですが、自分の感情を言葉にしたり、だれかに受け止めてもらったりすると、不安感が和らぎ前向きに考えられるようになるものです。そうした機会を奪うことになったコロナ禍は、子育て中の保護者に「人とのつながり」の大きさを改めて浮かび上がらせたといえます。

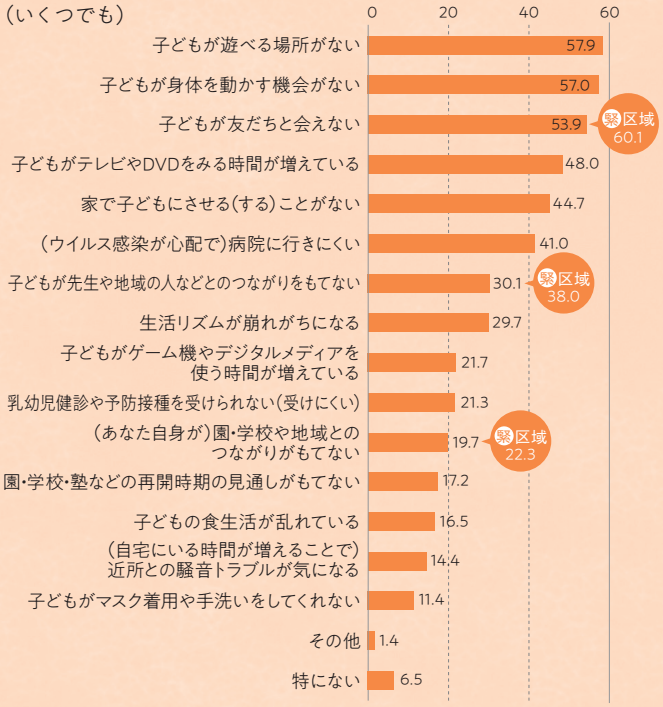
図1 人とのつながりを大切にしたい



※調査は 2020 年 5 月 22 日～ 24 日に実施。

図2 コロナ流行に伴う悩みや気がかり

Q.コロナ流行に伴い、現在、対象のお子さまやあなたご自身のことについて、以下のような悩みや気がかりがありますか。（いくつでも）



※複数回答。　※調査は 2020 年 5 月 22 日～ 24 日に実施。
※緊区域＝緊急事態宣言区域は、調査時期において緊急事態措置が実施されていた北海道、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県の５都道県の母親358人の回答。

「Withコロナ」時代につながりをどう強めるか

４～５月の緊急事態宣言下のように対面による接

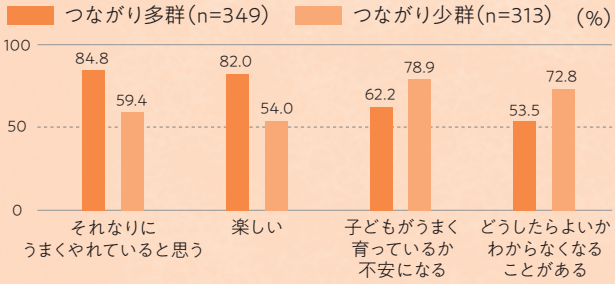
■幼児・小学生の生活に対する新型コロナウイルス感染症の影響調査

調査目的：新型コロナウイルス感染症の流行とそれに伴う生活環境の変化が、幼児と小学生の親子に与えた影響を明らかにすること。
調査方法：インターネット調査　調査地域：全国
調査時期：2020年5月22日～5月24日
調査対象者：1歳児（2018年度生まれ）～小学6年生の子どもをもつ母親2,266人
調査項目：子どもの生活実態や子どもの様子／母親の子育ての悩みや気がかり、子育てに関わる意識、養育行動、今後の子育て・教育への意向など

◎調査結果はこちらから閲覧できます。
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5520

データ解説・本調査の担当
ベネッセ教育総合研究所主任研究員　真田 美恵子（さなだ・みえこ）
乳幼児領域を中心に、保護者や幼稚園・保育所・認定こども園の園長を対象とした意識や実態の調査研究を担当。

図3 子育てに向き合う気持ち（子育てを通した人とのつながり別）

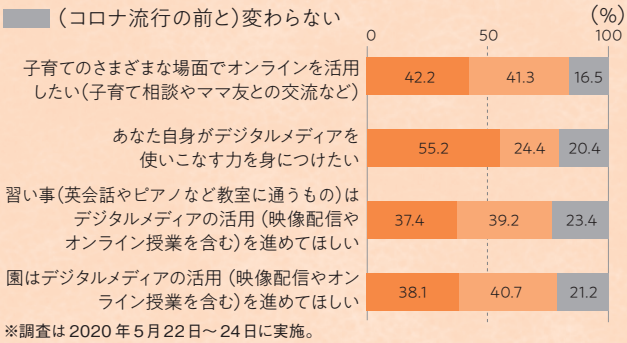


※とてもあてはまる＋まああてはまる。　※（　）はサンプル数。
※つながり多群・少群は（配偶者・パートナー以外に）「子育てについて気軽に話せる人」「子育ての悩みを相談できる人」「子育ての情報を教えてくれる人」「子どものことを気にかけてくれる人」「あなたのことを気にかけてくれる人」への回答を得点化、合計を3区分した（中群略）。　※調査は2020年5月22日～24日に実施。

触が困難な状況で、人とのつながりを保つために期待されるのがオンラインツールの活用です。保護者にオンラインに対する考え方を聞くと、それらが始まったばかりの5月調査時点では、多くの項目で期待や活用意向のあり・なしがそれぞれ4割ずつと、意見が分かれる結果となりました（図4）。自由記述回答にも、「登園できないときに、オンラインで保育を受けたり、先生や友だちとつながったりできるとよい」といった声があった一方で、「電子機器が苦手でついていけない」といった声が寄せられました。

保護者によってオンラインツールの考え方やデジタル環境は異なります。各家庭の多様な状況に配慮しながら、保護者に人とのつながりの選択肢を増やせるようなデジタル・オンラインツールの活用方法を考えることがますます重要になるでしょう。そのようにして、大人が状況の変化に対応し、工夫して困難を乗り越えていこうとする姿は、子どもたちにも多くの学びを伝えていくのではないでしょうか。

図4 オンラインサービス等の期待・活用意向



※調査は2020年5月22日～24日に実施。

園と保護者をつなぐ、ICTツールの可能性

東京大学大学院教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター
特任助教　高橋 翠（たかはし・みどり）先生*

コロナ禍で、ICTツールの活用を検討する園が全国的に増えています。自治体や地域、園による差がある中、ICTツールの導入に積極的な園の中には、保護者への連絡手段にメールやSNSを活用するほか、子どもの育ちを伝えるドキュメンテーションやポートフォリオを電子化しているところもあります。緊急事態宣言下にオンラインによる保育や保護者会、子育て支援を実施し、子どもや保護者とのつながり維持に努めた園もありました。

ICTツールの導入が進まない園には多忙で新たな取り組みの準備が難しい環境のほか、セキュリティー面への不安や家庭の情報格差、情報リテラシーを得る機会の不足など、さまざまな事情があるようです。園だけでは解決が難しい問題もあるので、自治体との連携が望まれます。

ICTツールを「代替手段」と捉えると、「今のままでよい」という発想になりがちです。しかし、ICTツールは園の理念の実現に役立ったり、園と保護者とのつながりを強めたりといった保育や幼児教育の幅を大きく広げる可能性を秘めています。一例ですが、運動会や生活発表会を動画で配信すれば、離れた場所に住む祖父母や地域の方々も視聴でき、子どもの育ちをより多くの人で見守り、支えることにつなげていけるでしょう。

まずは簡便なツールの活用からスタートし、効果を実感できたら活用の幅を広げていくという形が考えられます。この分野は若い先生が得意なことが多いので、「ICT係」などを設置して力を発揮してもらい、世代間の学び合いに結びつけるのもよい方法でしょう。新たなテクノロジーにより園と保護者とのつながりが強まり、子どもの育ちを支える取り組みが実現されることを願っています。

＊高橋先生のプロフィール詳細は、P.2をご参照ください。

Interview

After/With コロナの時代の園づくりと安全管理

想定外の事態をよりよい園づくりのチャンスに

猪熊弘子（いのくま・ひろこ）先生

ジャーナリスト、名寄市立大学特命教授、城西国際大学特命連携教授。一般社団法人子ども安全計画研究所代表理事。保育制度・政策、保育事故、保育の質、子どもの防災について執筆・翻訳、メディア出演、講演などを行う。2020年4月から明福寺ルンビニー学園幼稚園・保育園の副園長を務める。著書に『死を招いた保育』（ひとなる書房）ほか多数。

コロナの感染拡大という想定外の事態により、多くの園で感染防止のために長期間の臨時休園や受け入れの縮小を余儀なくされました。また、3密の回避という観点から、これまでの保育のあり方の見直しが求められ、今も試行錯誤を続けている状況です。コロナ禍によって明らかになった幼児教育の課題は何か、そして、コロナ禍の最中に求められる園の災害への備えとはどのようなものか、子どもの安全を守る活動に取り組むジャーナリストの猪熊弘子先生にお話をうかがいました。

＊本記事は2020年7月下旬に取材しました。

想定外の休園から考え始める「子ども主体」の幼児教育

コロナが問いかける「社会は子どもたちをどう育てるか」

まず、今回の想定外の事態を、少し大きな視点で振り返ってみたいと思います。

2月末に政府から全国の小・中学校、高校、特別支援学校に休校要請が出された後、幼稚園では3月から休園となったところが少なくありませんでした。しかし、保育所や認定こども園では2・3号認定の子どもを預かるため、緊急事態宣言中も多くが保育を継続しました。感染防止の観点から登園をやめた子どもがいた一方で、保護者の仕事のために登園を続ける子どももいた事実は、保育所や認定こども園が働く保護者たちを支える社会のインフラとして、重要な役割を担っていることを、広く認識させたのではないでしょうか。

幼児教育は「子ども主体」で展開されるものです。同時に、子どもが日常を過ごすためにはさまざまな大人の存在が必要であることも事実です。コロナ禍において、自らの意思にかかわらず登園を続けなければならない子どもがいた事実は、子ども主体の保育が、実は大人の存在の上に成り立っていたことも、私たちに突きつけたといえるでしょう。

1989年11月20日に国連総会で採択された「子どもの権利条約」では、子どもの権利を守るためには、父母や家族を始めとした子どもを取り巻くすべての人の権利が守られていなければならない、とうたっています。つまり、子どもを取り巻く大人たちが豊かでいられる社会でなければ、子ども主体の教育は実現できないということです。

では、今回のコロナ禍で、大人たちの権利は守ら

れていたのでしょうか。保護者の権利はもちろん、ともに子どもを守る保育者の権利はどうだったのでしょうか。

子どもの権利や幸せを考えることは、私たち自身の権利や幸せを考えることにほかなりません。今回の事態をたまたま起こってしまった想定外のできごととして捉えるだけではなく、「そもそも、今、子どもたちは幸せなのか」「大人たちはどうか」「子どもが大人とともにもっと幸せになれる社会とはどんな社会だろうか」と、丁寧に考えてみる機会にすべきではないかと考えています。

子どもたちが失った時間や経験を取り戻せる配慮と工夫を

オンラインツールを使って保育はどこまで補完できるか

長期間の臨時休園中、子どもや保護者とのコミュニケーションツールとして可能性を感じさせたのは、オンラインでの会議システムを始めとするICTの活用です。すべての家庭に必要な機器があるわけではないので、電話や郵送などでのサポートは今後も必要でしょうが、保護者のスマートフォンなどの機器を介して子どもとどんなやり取りをすればよいか、データ通信容量等にも配慮しながら検討しておくことが、コロナの第２波、第３波に備える意味でも各園には求められると思います。

ただ、ICTを活用すれば十分な保育ができるかというと、多くの保育者は否定的なのではないでしょうか。私も、オンラインを通じた保育では、園で子どもたちに提供している豊かな時間を、同じように提供することはできないと思います。

思い出すのは、東日本大震災後に、数多くの被災地の園を訪ねたときのことです。福島県では、原子力発電所の事故によって、自然遊びができなくなった園がたくさんありました。１年近く経った冬に、子どもたちがようやく園庭で遊べたとき、「鉄棒ってすごく冷たいんだよ」と大切なことを発見したように保育者に教えてくれた子どもがいました。また、乗れていたはずの三輪車に乗れなくなった子ども、大好きだったすべり台の遊び方を忘れてしまった子どももいたことなど、たくさんの話をあちこちの園で聞きました。ICTが進歩し、オンラインツールがいくら便利になっても、子どもたちから失われてしまう時間や体験の代わりはできないことを、私たちは忘れてはなりません。

子どもたちは「取り戻す力」をもっている

ただ、失われてしまう時間や体験があったとしても、子どもたちはそれらを取り戻しにくるのも事実です。例えば、園で十分に砂遊びができなかった子どもは、小学生になってからでも、夢中で砂遊びに興じることがあったりします。時間や体験、そして愛情も「あのときに子どもが経験できなかったからもうダメだ」と考えるのではなく、子どもはあとで取り戻す力をもっているのだと信じて、時間や体験を渡していくことが必要だと思います。

そのためには、子どもが経験できなかったことを保育者や保護者が理解しておくことが求められます。子どもたちが砂や泥にまみれて十分に遊ぶことができなかったのなら、理想をいえば、小学校とも連携して、収束後にそうした時間を多く確保する配慮や工夫が、本来なら必要でしょう。もちろん、現実には難しいことも多いと思いますが、幼児教育で大切にしていた時間を、「しかたがない」と簡単にあきらめてしまってはいけないと、私は考えています。

子どもに失われてしまった時間や体験があったとき、学年や学校種を超えて取り戻していくことは、子ども主体の教育を実現する上で非常に重要です。想定外の事態が起きた今だからこそ、私たちは幼児教育をどのように位置づけ、構築していくかを考え、行政とも連携しながら、保幼小連携などの取り組みを進めていくチャンスにしていっていただきたいと思います。

「子ども主体」という観点での教育活動の見直しを

行事の目的を捉え直し精選していくことが必要

私は、2020年4月から幼稚園・保育園の副園長を務めていますが、今、園でもっとも気を配っているのが感染防止です。おもちゃも使ったらすぐに消毒するため、子どもたちは好きなものを、好きなようには使いづらくなっています。午睡時も間隔をとって布団を並べていますし、園によってはついたてを立てて昼食をとらせているところもあるといいます。幼児教育では、密接なかかわりが生じやすいですから、制限のある中でのよりよい保育のあり方を、私たちもまだ模索しています。

日常の保育以上に頭を悩ませているのが、行事をどうするかという問題です。保護者からの行事の開催についての問い合わせは、きっとどこの園でも多いと思います。私は今こそ、園の行事の見直しの最大のチャンスだと考えています。園の行事の中には何年も前から続けているけれど、幼児教育本来の目的から考えたときに、存在意義が明確ではないものが残っている場合があります。新要領・指針*や園の教育目標に照らし合わせて、めざす子どもの姿の実現にそぐわない行事は、この機会に見直していきましょう。

子どもたちの力を借りてこれからの園をつくっていく

行事の意義を議論する中では、大切だけれどこれまで通りには実施できないものも出てくるでしょう。例えば、運動会も、今までと同じ形ではできないかもしれません。そのときは、子どもたちを巻き込んで、あるべき行事の姿を話し合ってみてほしいと思います。

年中・年長の子どもたちであれば「体がくっつかないようにするにはどうすればいいと思う？」などと保育者が問いかければ、きっといろいろなアイデアを出してくれるはずです。子どもたちにとっても、自分たちで考えるという機会は重要です。ただ、年中や年長の子どもたちが自由に意見を出し合いながら、考えをまとめていけるようになるには、やはりそれまでの保育者のかかわりが重要になってきます。3～4歳までずっと保育者の指示に従っていた子どもたちから、急に意見やアイデアは出てこないでしょう。早い段階から「○○ちゃんはどうしたいの？」と子どもに寄り添った問いかけをし、「そうだね。先生わかるよ」と共感をする。そうしたかかわりを積み重ねることで、子どもは認められたと感じて成長し、主体性を獲得していきます。

今回のコロナ禍を機に園のあり方を変えていこうと決意したら、そのときは、カリキュラムや行事の見直しにとどまることなく、子どもたちへのかかわりの見直しにまでつなげていっていただきたいと思います。そうすることで、園全体がコロナ禍をプラスのできごとへと転じていけるのだろうと感じています。

子どもたちの命を守る園になるために

子どもたちを守るための備えを再構築する

2020年は、コロナの感染拡大だけでなく、7月には豪雨災害もありました。近年、特に水害の規模が増大化しており、私たち保育者は子どもの命を守るため、コロナの第2波、第3波とともにさまざまな自然災害を想定して、備えておかなければなりません（図）。

図　コロナ禍以降の災害への備え

- 必要なものの備蓄
- コロナ感染時の園の対応づくり
- コロナ対応の記録を残す
- 避難訓練・避難場所の見直し
- 近隣の園・他の自治体の園とのネットワークづくり

まず、コロナの第2波、第3波への備えとして、園でできることは、マスク、消毒のためのアルコール類、おむつなどの備蓄です。そして、コロナに感染した人が園内に出た場合にどうするか、あるいは身近に出た場合にはどのように園内で把握するかといった流れを決めておくことです。また、今回のコロナ禍で、いつ、どんなことが起こり、どのようなことを考えて、何を決定したかを忘れないうちに記

＊2018年度に施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指します。

録して、整理しておくことも大切です。記録は、次に同じようなことが起きたときに、どうすべきかを考えるためのよりどころになるはずです。

避難訓練も重要です。避難訓練は主に自然災害発生時の備えとなりますが、コロナが収束しない中での災害に対応するために、今までのやり方を見直すことは大変重要な視点となります。地域のハザードマップなどを確認して、コロナへの感染対策をしながら、どこにどのように避難するか、いま一度見直しておきましょう。災害が起こる時間帯は予測不能で、子どもが休んでいる午睡中に起こるかもしれません。そうしたことも想定し、園としてどれほどの緊張感をもって取り組んでいるか、まずは問い直してみることが必要だと思います。

他園とネットワークを構築し ともに子どもを守っていく

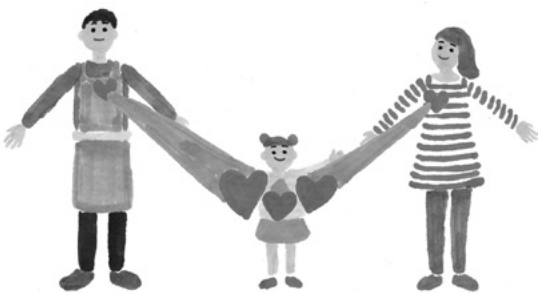
避難訓練に対して、「本当にこれで大丈夫だろうか」「子どもたちの命を守れるだろうか」と問い直していくと、新たな疑問が見えてくるかもしれません。例えば、自然災害が発生したとき、園児たちが避難する予定の場所は、コロナ禍を含め、本当の意味で避難に適切な場所といえるでしょうか。

そもそも避難所は、お年寄りなど地域の人たちが集まるため、幼児にとって過ごしやすい場所とは限りません。３密の回避という観点では、園にとどまったほうが安全な場合もあるでしょう。また、災害の内容や規模、発生する季節や時間帯などによっても対応は異なります。保護者のお迎えをどこでどのように待つのかも含めて、After/With コロナの時代の避難のあり方を園内で検討してみることは不可欠でしょう。

その際には、近隣の園と情報交換をすることも大切です。自園だけでは出てこないアイデアや人脈などを共有することができるでしょう。さらに、自治体の異なる他園とつながりをつくっておくこともお勧めします。例えば、自然災害が発生したとき、近隣の園は同じような被害を受けている可能性が高くなりますが、ほかの自治体の園であれば大きな被害はなく、さまざまな支援をお願いしやすいものです。

実際、東日本大震災による原子力発電所の事故のあと、福島県のある園は自然遊びが満足にできなくなった子どもたちのために、交流のあった他県の園から、どんぐりや松ぼっくりをたくさん送ってもらったそうです。食料や衣類といった命をつなぐ支援だけではなく、災害の影響が長期にわたるケースでは、そうした子どもたちの情緒面での成長を促すような支援も、園には必要になってきます。想定外の事態の中で、今、子どもたちに何が必要かをともに考え、支援し合えるようなネットワークの構築も、ぜひ中長期の目標に掲げていただきたいと思います。

コロナの感染拡大は私たちにとって多くの被害をもたらした不幸なできごとです。だからこそ、これを機に「幼児教育は何を大切にすべきなのか」「そこでの保育者の役割はどのようなものか」「自園の教育活動はめざすべき目的にかなったものか」と見直していき、コロナ禍という事態を少しでもプラスに活用していっていただきたいと思います。



保育者の方へのメッセージ

以前、東日本大震災の被災地の園を訪ね、震災時の様子を聞いていったとき、私は、「子どもの命を守る」という保育者の方々の確固たる思いに触れ、心から感動しました。そして、同時に、そうした保育者一人ひとりの優しさや知恵、経験ばかりに頼らずに、子どもたちの命を守るしくみづくりも必要だと思いました。After/With コロナの保育でも、保育者一人ひとりの思いだけでは解決が難しい問題が山積しています。小学校との連携１つをとっても、行政の協力がなければ容易ではありません。それでも私は、古いルールや慣習を時代に合ったものに変えながら、幼児教育をよりよいものにするチャンスが来たと信じています。保育者の方々にはぜひ、「ここが困っている」「もっとこうなればいい」という声を上げていただきたいと思います。私もみなさんと一緒に行動していきます。

園の取り組み事例❶（2020年7月下旬取材）

鳴門教育大学附属幼稚園（徳島県徳島市・国営）

今できることをポジティブに捉えて
子どもと一緒に新しい保育を生み出す

お話ししてくださった先生方

鳴門教育大学附属幼稚園 園長
佐々木 晃 先生

部内教頭・年中クラス担任
藤川佳余子 先生

ICT担当・年長クラス担任
杉山健人 先生

取り組みのポイント

休園中
- 園のウェブサイトを通じて家庭に動画や情報を発信し、電話での対話も併用しながら保護者サポートを行う。

再開後
- コロナ感染防止は生きるために必要なスキルと捉え、保育のあり方を探る。
- 子どものアイデアを聞きながら、行事や教育活動を再考する。
- 全体方針の伝達と個別対応を行いながら、保護者の様子を丁寧に見取る。

ICTを活用して園と家庭を結び、子どもの育ちをつなぐ

休園中は園のウェブサイトで5領域に関連する動画を配信

鳴門教育大学附属幼稚園のある徳島県では、コロナによる感染者は比較的少数で推移していましたが、全国に緊急事態宣言が出された4月半ばから5月末までは臨時休園を余儀なくされました。園では、家にこもりきりの親子が、前向きな気持ちを保てるようなサポートや情報発信について話し合ったと、園長の佐々木晃先生は振り返ります。

「密接な関係性や実感のある対話の中で人は育っていくと信じてきた私たちが、目の前に子どもがいない状況で何ができるのか、大いに悩みました。園生活は突然断ち切られてしまいましたが、生活の文脈をつなげて、子どもたちの育ちを捉えたい、会えないけれど思いを届けたい、そして、保護者とともに子どもの育ちを支えたいといった考えから、園で動画を作成して配信することにしました」

動画は、保育の5領域を意識して、家庭で楽しめる歌や体操、調理、遊びなどを紹介するコンテンツを約20本製作。園のウェブサイトの保護者限定ページから閲覧できるようにしました（写真1）。

同園では、これまでデジタル機器の活用は進んでおらず、動画を製作する機会もあまりありませんでした。製作は、ICT担当で年長クラス担任の杉山健人先生が他の保育者と協力して園内で撮影し、在宅

（写真1）動画には、佐々木園長や保育者が登場して、楽しい雰囲気を演出しました。

勤務のときに編集作業を行うなどして進めました。

「入園式直後の休園となったため、入園式でも歌えなかった園歌を配信することから始めました。特に心がけたのは、親子が家庭で楽しい気持ちになれるように、はしばしに笑いを誘う演出を入れたことです。登園再開後、多くの子どもたちが動画で紹介したものをよく知っていたり、遊びにすぐに反応してくれたりして、段差なく園生活に移行できたので、うれしく思いました」（杉山先生）

コロナ禍をきっかけとして ICT 活用の可能性に気づいた

同園では今回、初めて本格的な動画を撮影しましたが、今後の保育に活用できる可能性に気づいたといいます。

「子どもが植えたエダマメとトウモロコシを何日間かにわたって撮影し、コマ送りで再生すると、生長の様子がわかりやすく伝わる動画ができました（写真２）。こうしたデジタル機器の効果的な活用法をもっと研究したいと思いました。一方で、動画の視聴はあくまで興味をもつきっかけとし、本物を見たり感じたりして多様な経験を積むことを、常に念頭に置いておく必要性を感じました」（杉山先生）

保護者がインターネットを使った情報発信に理解を示したことから、登園再開後もサイト上にお便り

https://www.youtube.com/watch?v=HLRxcpkdXRU

（写真2）子どもたちが生長を気にしていた植物の様子を、コマ送りで見られるようにしました。

などを掲載して、ペーパーレス化を図ることにしました。省資源化や保育者の省力化に加え、紙を介したコロナの感染拡大を防止するねらいもあります。事前に全家庭にウェブサイトの閲覧が可能かを確認し、一部の家庭には従来通り、紙の印刷物を配布するといった配慮もしています。

休園中には、気になる家庭に対して、保育者が積極的に電話をして悩みや不安を聞くサポートも行いました。

「一方向の伝達だけではなく、相手の声をじかに聞いてやり取りするのは、保育や教育の基本です。保育者からの電話にホッとした様子で悩みを話してくれた保護者もいました」（佐々木園長）

休園中、保育者は２チームに分かれて、交互に園での勤務と在宅勤務に従事しました。園勤務の保育者は動植物の世話や修繕、開園準備などを行い、在宅勤務の保育者は自宅で対応できる作業をしたり、普段はなかなか時間が取れない自己研修を行ったりしました。

休園中は親子がまっすぐに向き合えるよさもあった

登園再開後に休園期間を振り返ると、子どもや保護者にとってはプラスとマイナスの両面があったと、佐々木園長は話します。

「保護者が子どもと向き合う時間ができたことは、双方にとって大きなプラスでしょう。日頃は『子どもはどうすると喜ぶのか』『どのように過ごすと有意義な時間になるのか』など、子どもの１日の過ごし方について真剣に考える余裕はなかなかありませんが、休園中は会話の時間が増え、一緒に工作などにチャレンジした保護者も多かったようです」

また、子どもたちは、休園中、家事や在宅勤務をする保護者の姿を見ることができました。登園していると知ることのない保護者の姿を発見できたことも、子どもにとってプラスの影響があったと、佐々木園長は考えています。

一方で、普段とは異なる生活に対するストレスや不安から、保護者が子どもを叱る頻度が増え、自己嫌悪を抱いてしまったといったマイナスの影響を感じる報告も受けたといいます。さらに、実体験に基づく遊びや活動の機会が失われ、テレビやゲームなどに触れる時間が増えたことへの影響を心配する保護者の声もありました。

保育再開後の子どもの姿から「レジリエンス」の育ちが見えた

ネガティブな影響は見られず子どもの強さを再確認した

しばらくの間、自宅で外出もままならない生活を送った子どもたちには、どのような影響が表れるのか……。佐々木園長は心配しながら登園再開の日を迎えましたが、普段と大きく変わらない姿に胸をなで下ろしたといいます。

「久しぶりに見た子どもたちの表情は、保育者や友だちと再会できた喜びにあふれていました。保育の再開後も注意深く様子を観察しましたが、子どもたちの内面にはネガティブな影響はあまり見られず、子どもの強さを改めて感じました」（佐々木園長）

それでも、子どもを取り巻く社会環境は大きく変わり、保育のあり方にも変化が求められています。再開後の保育の方針は次のように考えています。

「現代社会には多様なできごとが起こるものと受け止め、そのときどきの状況でよりよい生き方ができるように子どもを支えることが、私たちの役割だと考えています。コロナ禍で今までの価値観は通用しなくなりましたが、発想を転換し、マスク着用やキープディスタンスなどは生きるために必要なスキルとして身につくようにしながら、その中で子どもの育ちを支える保育のあり方を探っていきたいと考えています」（佐々木園長）

同園では、取材時の７月下旬には、主に次のような感染対策を行いました。

- 子どもの手指をこまめに消毒する
- 通常、子どもはマスクを着用しないが、密集時には着用する
- 保育者は常時マスクを着用する
- 遊具や教材はこまめに消毒する
- 出入口は１か所にして消毒を徹底する
- ウイルスを持ち込まないために、事前連絡のない人は園内に入れないようにする

子どもからアイデアを集めてイベントの内容を見直す

できるだけ３密の状態を避けるため、行事も再考しました。例えば、例年７月には年長児を中心として、開会式の花火のあとに子どもたちが阿波踊りを踊ったり、お化け屋敷や夜店を出店したりして、お泊まり保育をする「夕べの集い」というイベントを行っていますが、現状では実施が難しいと判断しました。しかし、子どもから残念がる声が多く聞かれ、保育者にも思い出をつくってほしいという思いがあり、中止ではなく別の形での実施を模索しました。

「なんとか、すべての子どもが納得した形で実施したいと考えました。そこで、年長の子どもたちに前年度の写真を見せて『このように人が集まる状態は避けないといけないのだけれど、どうしたらいいと思う？』と投げかけて、アイデアを募りました」（杉山先生）

すると、「花火はできないから、画用紙に花火の絵を描こう」「お化け屋敷は離れた場所からボールを投げてお化けを倒せばいい」など、保育者が驚かされるほど豊かな発想が出てきました。お泊まり保育は中止にしましたが、そうした子どもたちのアイデアを参考にしながら、阿波踊りはクラス別に部屋で踊ってオンラインでつなぐといった工夫も取り入れて、イベントを実施しました（写真３）。部内教頭の藤川佳余子先生は次のように話します。

「感染リスクの制約のため不自由さや大変さはありますが、半面、子どもとともに新しい保育をつくり出していくクリエイティブな楽しみも感じます。今回、子ども自身が『どうしたら実現できるか』を考えて準備した過程は成長につながったと思いますし、より特別な思い出にもなったと考えています」

（写真３）園行事は、３密を避けられないから中止ではなく、どのような形にすれば実施できるかを、子どもと一緒に考えて見直しています。

「コロナ」を取り入れた遊びに保育者も元気づけられた

日常の保育では、極端に３密になる状況は避けていますが、常に距離を取ったままでは遊びや活動は成立しません。そのため、保育の内容は従来から大きく変更せず、室内での絵本の読み聞かせ時など子どもが密集しやすい場面ではマスク着用を促したり、使用後の道具はこまめに消毒したりといった感染対

策をして、乗り切っています（写真４）。

子どもが遊びの中に「コロナ」を取り入れる姿も多く見られます。工作でメガホンを作って周りの子どもたちに手洗いを呼びかけたり、お店ごっこで飛沫防止のフィルムを設置したり、床に等間隔にテープを貼ってキープディスタンスを表してみたり……。保育者は、そうした発想を一緒に楽しんで、遊びが展開するようにサポートしています。

「子どもには、嫌なことや不安なことがあると、それを遊びの中で再現して乗り越えようとするタフさがあります。今回のコロナ禍に対しても、自分たちなりの方法で立ち向かおうとしているのでしょう。これはまさしくレジリエンス（跳ね返す力）だと感じており、その姿に私たちのほうが元気づけられています」（佐々木園長）

（写真４）状況に応じてマスクを着用してもらうなどしながら、できる限り、通常通りの保育を維持して子どもの育ちを促せるようにしています。

全員でよりよい方策を考える過程で園内のチーム意識が強固に

休園期間が長引いたため、保育再開後、子どもが園やクラスになじめているかと心配する保護者も多く見られます。感染防止の観点から保護者会や保育参観などが実施しづらいことも、特に新入園児の保護者との信頼関係の構築を難しくしています。

そこで、６月に保育の目的や意義を伝え、ともに子どもを育てる関係性を築くことを目的として、「ペアレンツセミナー」という約 30 分間の動画を年齢ごとに作成し、配信しました。また、６月の後半には短時間ながらも保育を見てもらう機会をつくり、担任が１対１の保護者面談を行い、意思疎通を図りました。

「私が担任を務める年中児クラスもそうでしたが、新入園児クラスの保護者の方々が、子どもたちの様子や私たち保育者の人となりをご自分の目で見て、安心された様子が伝わりました。また、全体的な保育の方向性の確認とともに個別の対話もできて、理解を深めていただいたと思います」（藤川先生）

さらに、同園ではきめ細やかに保護者の様子を見取り、「子どもは家でどのような様子か」「困ったり悩んだりしていることはないか」などと、以前にも増して丁寧に話しかけたり、必要に応じて電話をかけたりするフォローを心がけています。

コロナ禍への対応に関して、「こうすればよい」という１つの正解はだれももっていません。そのため、佐々木園長は保育者一人ひとりの強みを生かしながら、それぞれの考えを引き出して、よりよい方策をつくり上げる姿勢を大切にしています。その過程を通して、園内のチーム意識が以前よりも強固になっているといいます。

「マニュアル通りではなく、一人ひとりが自分の問題と捉えて主体的に考えようとしていることが、常に責任感のある姿勢につながっているのでしょう。ただし、今は頑張りすぎてしまいやすい状況です。『どこにもっとも心を込めるか』を意識して仕事を精選し、外部に任せられる業務はどんどん外注するなどして『働き方改革』にも取り組み、先生方の心身の健康も支えていきたいと思います」（佐々木園長）

園長先生から全国の保育者へのメッセージ

地域ごとに感染状況は異なりますが、コロナ禍に必死に立ち向かって子どもを守ろうとしている同志たちが全国にいると思うと、とても心強く、私たちも頑張らなくてはという気持ちになります。どれほどの苦難に見舞われても、子どもたちは遊び続けます。それはまさに希望の光です。それぞれの園が孤立せずにつながり、この事態を乗り越えることで、今までよりもずっとすばらしい保育が実現できると、私は信じています。保育所・幼稚園・認定こども園が、本当の意味で三位一体となって前進していきましょう。

鳴門教育大学附属幼稚園

1893（明治 26）年開園。子どもの遊びを誘発する環境を「遊誘財（ゆうゆうざい）」と名づけ、その研究と実践に力を注ぎ、豊かな遊びに基づく保育を展開する。

◎ 園　長：佐々木 晃先生
◎ 所在地：徳島県徳島市南前川町 2丁目 11番地の１
◎ 園児数：130名（3～5歳）

園の取り組み事例 ②（2020 年 9 月上旬取材）

まちのこども園 代々木公園（東京都渋谷区・私営）

想定外の状況下も対話を重ねて よりよい保育を追求し ICT の活用で実現をめざす

お話ししてくださった先生方

まちのこども園
代々木公園 園長
山岸日登美 先生

コミュニティ
コーディネーター
しゅった
習田和正 さん

取り組みのポイント

- 園の理念や目標に沿って、今あるもの・できることを検討して状況の変化に対応する。
- 保育者一人ひとりが「できること」を考え、ICT ツールを活用して実現を図る。
- 保護者との情報共有やコミュニケーションを徹底し、ともに状況を乗り越える関係をつくる。

状況が変わっても、開園以来の理念や目標を大切に

「今日は何をしたい？」と問いかけ その日の保育を形づくる

東京都内に５園を運営する、まちの保育園・こども園。「まちぐるみ」で子どもを育てるとともに、子どもたちと「まちづくり」に取り組むという考え方をもち、子どもを真ん中にして園と保護者、地域コミュニティがつながる保育を展開しています。そうした全園共通の理念とともに、園ごとに地域性や環境、施設、そこに集う人々の多様性に合わせた関係性づくりを大切にしており、それぞれ特色のある保育を実践しています。

「まちのこども園 代々木公園」は、都心では屈指の広さを誇る代々木公園という恵まれた環境の中にあります。同園では設立時に職員全員で話し合い、「変化し続けること」「子どもは価値の創造者であること」という２つを、大切な理念として確認しました。園長の山岸日登美先生は次のように説明します。

「代々木公園は、時代の移り変わりとともに役割を変えながら多様な文化を発信してきました。私たちの園も変化を恐れず、毎年、子どもの実態に合わせて保育を柔軟につくり変えることを大切にしています。そして、保育を通して子どもが創り出す価値を発見し、その育ちを支え、世の中に届けていきたいと考えています」

同園の保育の特色がよく表れているのが、毎朝、子どもたちに「今日は何をしたい？」と問いかけ、一人ひとりのやりたいことを出発点として、その日の保育を形づくっていくことです。子どもたちは、「昨日やった染め物を、今日は公園で拾った葉っぱを使ってやりたい」「どんぐりがたくさん落ちていたから集めて何かを作りたい」などと自由に発想します。保育者はそうした想いをくみ取り、遊びや活動に発展させる環境を柔軟につくり上げていきます。

保育者一人ひとりの想いを ICT ツールの活用で実現

開園以来の理念や目標を大切にして対話を重ねる保育は、コロナの感染拡大に伴う休園中も、形を変えて継続されました。渋谷区の要請に従い、４月上旬から一斉休園の措置が決まった際、保育者に対して「子どもや保護者に向けて、園として何ができるか」などのアイデアを求めました。子どもの興味・関心に寄り添いながら保護者や地域と連携し、保育環境を整えていく役割の専任職員「コミュニティコーディネーター」の習田和正さんはこう話します。

「だれもが経験したことのない今回の事態に柔軟に対応できたのは、園長のリーダーシップやビジョンのもと『何ができるか』を職員一人ひとりと対話して、アイデアを出し合ったことが本当に大きかったと思います。『こんなことができるのではないか』といった保育者の考えを実現するための具体的なしくみを、ICT ツールなどを活用しながら検討していきました」

その中で出たのは、「保育の継続」「家庭の困り感を拾いたい」「地域のために何ができるのか」という主に３つでした。保育の継続については、ウェブ会議システムを活用して、毎日の朝の会や週に１、２回のオンライン保育を実施しました。さらに、家に閉じこもる状況が親子に及ぼす影響を心配する声も多く、オンラインによる保護者面談なども行いました。

これまで同園では、積極的に保育に ICT を取り入れてきたため、オンラインツールの導入も比較的スムーズでした。保護者への事務連絡や情報共有にはスマートフォンの連絡アプリを活用しているほか、子どもの育ちを記録するドキュメンテーションの製作もパソコンで行っています。また、各クラスにはタブレット端末があり、子どもたちが調べものをするなど、自由に使いこなす姿も見られます。ウェブ会議システムに関しては、本社や他園との打ち合わせに管理職の職員が使うだけだったため、休園に際しては、連絡アプリを通して保護者に操作方法を説明するなどして周知しました。そうしたことはすべて、保護者の理解や協力がなければできないため、日頃からよい関係性をつくることの大切さを改めて感じたといいます。

休園中はオンラインでつながりを保ち、保育を継続

「双方向性」に配慮して オンライン保育を実施

毎朝、クラスごとに実施した朝の会では、保育者と子どもや、子ども同士が顔を合わせてつながりを保つことを一番の目的に据えました。家庭の都合も考慮し、基本的に自由参加としましたが、多くの親子が毎朝楽しみに参加する姿が見られました。保育者は「元気？」「今日は何をするの？」などと質問を投げかけ、健康確認や会話の中で子どもたちが前向きな気持ちになるようにリードしました。

そして、週に１、２回、通常は午前中にオンライン保育「おうちでこども園」を実施しました。特に重視したのは「双方向性」です。

「保育者が『これをしましょう』と一方的に決めるのではなく、普段の保育と同様、朝の会の会話などから子どもの興味や関心を注意深くキャッチし、そこから活動に発展させていきました。ICT ツールは使い方によっては一方通行にもなるため、その点には常に配慮しました」（山岸園長）

オンラインによる「おうちでこども園」は人数が多すぎると進行が難しくなることもわかり、事前にテーマを伝えて希望を募り、内容に応じてグループ分けするなどの工夫も行いました。

４、５歳児を対象に実施した「コラージュをつく

（写真）「おうちでこども園」の「コラージュをつくろう」。

ろう」では、事前にコラージュの作り方の動画を配信して興味をもった子どもに作品を作ってもらいました（P.19 写真）。そして、「おうちでこども園」の時間に順番に作品を紹介し合い、保育者は質問を投げかけて子どもたちの自由な発想と表現を促しました。ストーリーがよく練られた作品が多く、ある子どもは代々木公園や海、花畑などの写真を切り取って貼りつけていました。保育者は、子どもの豊かなイマジネーションを感じ取ったといいます。

また、休園前から染め物について子ども同士で対話をしていたことを受け、休園中に家庭で自主的に作品を作った子どもがいました。そこで、「おうちでこども園」の時間に発表してもらい、ほかの子どもには家の中で染め物ができそうなものを探して保護者と試してみるのはどうだろうという話をしました。次の時間、子どもたちは野菜や果物などで染めた作品を持ち寄り、保育者はどのような物を使うと染めやすいかなど、子ども同士の対話を促しながら、活動が発展するようにフォローしました。この染め物への興味・試行錯誤は、登園再開後も続いています。

並行して、保育者が作成したオリジナル動画の配信にも取り組みました。「おうちでこども園」に参加できなかった子どもが、あとから活動の様子が見られるコンテンツを準備したり、家庭でできる遊びや歌、体操を紹介したりなど、2か月間で約120本もの動画を配信したといいます。なかには、「これをやりたいね」という子どもや保育者からの発信をきっかけとしたものも数多くありました。賛同する人によって始まったプロジェクトが、動画だけでなく「おうちでこども園」にもつながり、普段の保育のように、クラスや学年を超えた活動へと発展していきました。そうしたコンテンツに子どもと一緒に参加した保護者からは、「園とのつながりが感じられて安心する」といった感想も多く寄せられました。

ウェブ会議システムで各家庭の保護者面談を実施

オンラインツールを活用した保護者へのサポートも行いました。担任がウェブ会議システムを用いて保護者面談を実施。子どもや家庭の様子をヒアリングしたほか、保護者の悩みや困っていることを聞き、園としてできることを一つひとつ考えていきました。

休園中には、保護者が自由にウェブ会議システム

上のルームを訪問して、保育者や看護師などと話ができる「Welcome room」も何回か実施しました。事前申し込みは不要で、開設中はだれでも気兼ねなく利用できるように配慮しました。

さらに家庭と家庭をつなぐツールとして機能したのが、写真共有サービスです。従来は行事やクラスの写真を保護者と共有するために用いていましたが、休園中は各家庭で子どもが遊ぶ姿や作品などの写真を投稿するように呼びかけました。

「家庭が孤立しやすい状況で、『○○ちゃんが元気でよかった』『ほかの家ではこんな遊びをして過ごしているんだな』などと、いろいろな家庭の様子を知ることで不安を和らげるとともに、家で楽しく過ごすヒントを見つけてほしいと考えました」（山岸園長）

毎朝のミーティングや協働作業で保育者のメンタル面をサポート

休園中、保育者の多くは在宅で業務を進めました。毎朝、日課としたのが、各学年などのグループごとのオンラインミーティングです。

「その日の作業内容を確認するとともに、もう1つのねらいだったのが、保育者同士が励まし合い、前向きな気持ちを保つことでした。特に地方出身でひとり暮らしの先生は孤独になりやすいと思ったからです。同じ理由で、オンライン保育の準備や動画製作などの作業は、1人ではなくチームで協働しながら

図 在宅勤務時の個人研究の内容（一部抜粋）

- 代々木公園を活かした五感を育む保育について
- 持続可能な社会と遊び環境の設定
- よりよいチームと人間関係を築くための関係力について
- 乳児期の人見知り
- 発達心理学の基礎概念および教育の思想と歴史的変遷
- コロナ禍にある世界各国の保育の取り組みについて
- 保育実践における観察や記録方法に関する理論の整理

進める態勢を整えました」（山岸園長）

また、子どもや保護者に向けた発信と並行して、保育者は時間をつくって自己研鑽にも努めました。現在の課題意識などをもとに全員がさまざまなテーマの個人研究を行い、発表の機会も設けました（図）。

さらに、「まちの広場」という仕事以外のことを話す場も、有志によって開設されました。オンラインの「まちの広場」に集った保育者は、ときに昼食を食べながらさまざまな話をして、つながりを感じたり、気晴らしができたりしたといいます。

コミュニティの力を強化して不確かな状況を乗り越える

登園再開後は、手洗いや消毒などの独自の感染対策ガイドラインを、対話を重ねながらつくり上げる一方で、保育の中では一定のリスクは避けられないと考え、そのことを保護者に繰り返し伝えています。

「子どもの育ちを保障するために、可能な限り保育内容は変えていません。しかし、消毒などに時間を取られて子どもと接する時間が減ったり、保育者がマスクを着用することで特に0歳児に表情や口元からのメッセージが伝わらず、今後の発達に影響が出ないかと不安に思うなど、さまざまな悩みがあります。そうした事情を保護者にも伝えて共有し、子どもの育ちと感染対策とのバランスをどこでとるかを一緒に考えていきたいと思います」（山岸園長）

コロナ禍をきっかけとしてICTツールの活用が進んだ一面があり、今後の保育や園運営にも生かしたいと考えています。

「ウェブ会議システムによるコミュニケーションは、大人よりも子どものほうがすぐに慣れました。そうしたツールを使い、他園の子どもや園外の人たちとつながる活動なども検討したいと思います」（山岸園長）

登園再開後も、さまざまな事情により、登園がかなわない一部の子どもがいます。今後、そうした家庭に保育の様子をリアルタイムで配信し、オンライン保育を受けられるしくみの構築も検討しています。さらに、登園再開後には、オンラインによる「新型コロナウイルスへの対応に関する懇談会」を開催。園の状況を伝えるとともに、保育者の悩みや想いも率直に伝え、保護者と前向きな対話をして、より強固な関係性を築きました。オンライン保護者会は、感染対策だけでなく保護者の状況や考え方を尊重しながら、これからも継続する予定です。

同園ではもともと保護者や地域とともに子どもを育てることに力を入れてきましたが、コロナ禍を機に、その大切さに改めて気づいたといいます。地域に目を向けると、普段、子どもと交流のある商店街などの活気が失われている状況があります。

「最近、子どもたちと『幸せ』について対話をする時間を多く設けており、その中でさまざまな言葉や作品が生み出されています。コロナ禍で失われたものはたくさんありますが、私たちにはどんなに小さなことからも幸せを感じ取る力があると信じています。今後、そうした成果を保護者や地域のみなさんにお届けすることで、微力でも『まち』の力を取り戻すきっかけになればと考えています」（山岸園長）

現在も不透明な情勢が続きますが、今後も開園以来の理念や目標を見失わず、園・保護者・地域のコミュニティが子どもを中心に一体となって力を発揮し、子どもの育ちを支えることをめざしていきます。

園長先生から全国の保育者へのメッセージ

私たち保育者は常に笑顔でいるべきという思いが強く、外部に弱さを漏らさない傾向があるように思います。とても大切な心がけですが、多くを抱え込んで無理をしすぎるという側面もあります。コロナの影響が長引く中、頑張る保育者を支える上でも、保護者や地域の方々につらいことや困っていることを本音で語ることで、本当の意味でのコミュニケーションができるかもしれないと思うようになりました。コミュニティをもっと頼り、保育者自身が穏やかでいられることで、子どもにも好影響がもたらされるのではないでしょうか。

まちのこども園 代々木公園

ＪＲ原宿駅から徒歩４分、代々木公園の中に立地。園舎は日本家屋をイメージして造られ、中心には子ども同士がつながり合うアトリエがある。

◎ 園　長：山岸日登美先生
◎ 所在地：東京都渋谷区代々木神園町2-1
◎ 園児数：128人（0～5歳）

刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの幼児教育」バックナンバー

2020 春 | 特集 | 全国調査から浮かび上がる 保育の課題と解決のヒント

2019 秋 | 特集 | 段差を連続性に！ ともに育てる保幼小接続

2019 春 | 特集 | 次の保育につながる「記録」とは？

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

◎ウェブサイトから、すべての記事を無料で閲覧・ダウンロードできます。

ベネッセ　これからの幼児教育　検索

https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/

Benesse

「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口
〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17　TEL.0120-926-610（通話料無料）　受付時間／9:00～18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、TEL.086-214-6301へおかけください（ただし通話料がかかります）。

これからの幼児教育　2020 Autumn | 2020年10月25日発行　編集・発行人 岡田晴奈　発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2020
OPL056-01